

1. ウガンダの世界遺産:カスビのブガンダ歴代国王墓廟

今月ウガンダの世界遺産(文化遺産)であるカスビのブガンダ歴代国王の墓廟を訪問しました。カスビの墓廟はブガンダの歴史、文化、宗教そのものといってよいものだと思います。ウガンダ最大の王国であったブガンダの人々の民間伝承や習慣、そして王室の永遠の力に関する知識を保存し今に伝えているのがこの墓廟です。2001年、ユネスコは墓廟をウガンダの世界遺産に登録しました。

「ブガンダ王の霊廟」とも呼ばれるカスビの墓廟はブガンダ王国の最も尊敬される4人のカバカ(王)の墓です。墓廟は1882年に設立され、ウガンダで最も貴重な文化のおよび歴史的遺跡の1つとして認められました。現在、ウガンダで文化遺産として登録されているのはこの墓廟だけです。ユネスコの世界遺産としてはウガンダにはほかに2つの自然遺産の登録があります。ブウィンディ原生国立公園とルウェンゾリ山地国立公園の2つで、いずれも1994年にユネスコに登録されました。

カスビの墓廟は以下の歴代国王の安息の地です。

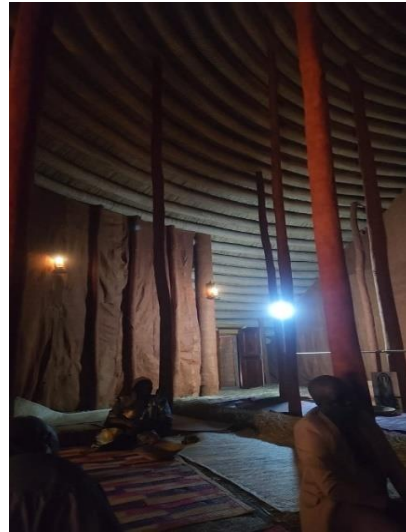
- ① ムテサ1世カバカ(1856-1884)。彼はブガンダ王国の初代国王でした。
- ② ムワンガ2世カバカ(1884-1888 および 1889-1897)。彼はウガンダへのイスラム教とキリスト教の導入期に君臨しました。彼はウガンダ殉教者の殉教を命じたことで知られています。
- ③ ダウディ・チュワ2世カバカ。彼は最も長く君臨した君主の1人でした。彼は4歳で王位に就き、1939年まで統治しました。
- ④ エドワード・ムテサ2世カバカ(1939-1966)。独立時に英国政府から権力を委譲されたウガンダ共和国の初代大統領。

墓廟は葦や茅葺きなど、自然由来の材料で作られた大きな円形構造物で構成されており、ブガンダ文化における永遠と連続性の象徴です。ブガンダの紋章や、祖霊のような初期のブガンダのトーテムシンボルなどの神聖なシンボルが墓の中にあります。墓には、儀式(新しいカバカの戴冠式)や供物を捧げるための儀式場もあります。現在でもブガンダ王国の文化保存センターとして機能し、観光客を呼び込み、ウガンダの人たちも歴史について学習する場所ともなっています。

墓廟は2010年3月に原因不明の火災で全体を焼失するという事態に直面しました。主要な霊廟と多くの王室の装身具が破壊されました。ウガンダ政府とユネスコなどの機関は、日本政府からの支援も得て、その修復に取り組んできました。長年にわたる修復作業の結果、2023年に修復を終え再び一般に公開されました。



〔カスビ王墓の全景〕



〔カスビ王墓の内部〕



〔ブガンダ王国カバカ(王)の末裔(右から二番目)や関係省庁の方々と〕

カスビ墓廟を訪問するとまず広々とした前庭に出迎えます。王墓は円錐型の大きな茅葺きの建物です。明るく大きな外観から建物の中に入ると日常からは切り離された厳粛な雰囲気包まれます。内部はウガンダの天然素材で作られた布や木材、敷物で飾られています。質素ながら歴代国王の業績を偲ぶ展示物を見ることができます。

このユネスコ遺産の特徴はその周囲に現在も関係者の方が住んでいることです。生ける遺跡、生活と共にある遺跡と言う説明を受けましたが、まさしくそのとおりです。私が訪問をした日も多くのウガンダの学生、児童が学習のため訪れていました。

前述したとおり火災で消失したこの遺産の修復を日本政府はユネスコを通じ支援しました。現在では墓廟は危機遺産のステータスを克服し、防災施設に守られた形となっています。



〔日本が供与した消火装置〕



〔日本が供与した消火ポンプ〕

2. モロト県 セーブ・ザ・チルドレン・ジャパンのプロジェクト訪問

今月ウガンダ北部のケニア国境に近いモロト県に展開する公益社団法人セーブ・ザ・チルドレン・ジャパン（以下、セーブ・ザ・チルドレン）のプロジェクトサイトを訪問しました。モロト県はカラモジャと呼ばれる地域に位置しています。緑豊かなウガンダ南西部と異なり乾燥地域であり遊牧が盛んな地域です。ウガンダの他の地域と異なり、雨季が年に 1 回しかありません。砂漠地帯ではありませんが厳しい気候の地域となっています。データで示せばカラモジャ地域（モロト県を始め 9 県で構成される）の人口は約 150 万ですがウガンダ政府の統計によると 61%の住民が貧困に直面しています。また 80%を越える人口は慢性的な食料不足に陥っています。このためカラモジャ地方はアフリカで最も生活状況の厳しい地域となっています。

セーブ・ザ・チルドレンは、モロト県及び対象となる 3つの準郡において、農家の生産向上支援と母子栄養指導を通じた栄養改善事業を行っています。この事業は 2023 年 3 月に開始された 3 年をかけたプロジェクトです。

セーブ・ザ・チルドレンに限らず NGO の活動は、地元のパートナー団体との深い連携が欠かせません。このプロジェクトではコミュニティー開発局や農業研究機構、保健局、地域中核病院やその職員など多くの関係者と連携することにより成果を上げてきています。また、本事業により小規模灌漑施設やモデル農園が作られ地域に根ざした形で住民に技能が移転され持続的に機能していくことを目標にしています。

私を始め大使館職員は地元への参加の印としてこの地域の人たちが日常用いている布を巻いて挨拶しました。また威厳を表す帽子をプレゼントされました。

日本人の野本友愛（のもと ゆめ）職員も現地でスタッフと共に奮闘しています。



〔伝統集落:村落中心部で家畜を飼育〕



〔灌漑施設〕



〔相談窓口開所式〕



〔乳幼児の体重測定器を持つ野本職員〕

3、建設設備操業者の育成施設訪問

このコラムで既に何度かご紹介いたしましたとおり今ウガンダは経済成長の只中にあります。国内及び東アフリカ地域での経済発展のためにはインフラ整備が欠かせません。いわば無限にあるインフラ需要に対応するため建機とそれを操縦する人材育成も同時並行で行う必要があります。

日本政府は 2019 年に人材育成の訓練設備整備のための支援を決定しました。(国連工業開発機関(UNIDO)と連携した無償資金協力)。昨年 3 月、首都カンバラ北部のルウェロ県に施設は完成しウガンダ政府に引き渡しが行われました。赴任直後であったため筆者はこの引渡式には出席できませんでしたが、今回この施設を訪問することができました。

ウガンダには JBIC も支援した日本の建機が千台以上全国各地で活躍しています。これを整備し継続的に使用するための人材を育成する施設でもあります。訓練カリキュラムの開発は、世界的な建機メーカーであるコマツより提供されました。UNIDO と連携し訓練設

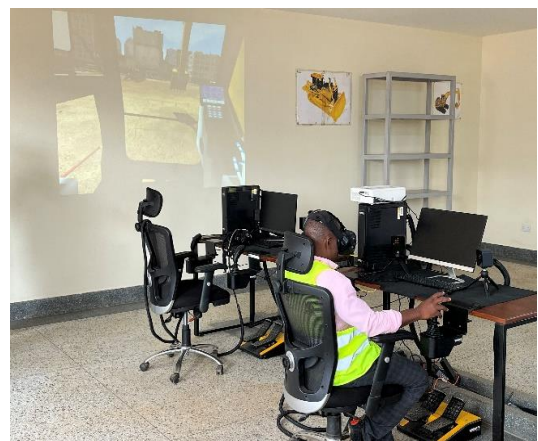
備の運営は軌道に乗っています。コマツはコマツ中近東本社敷地内に「ドバイトレーニング & デモンストレーションセンタ」を開設しておられます。今回訪れた施設で働く研修教官のかたは日本で、そしてコマツのドバイセンターで研修を受けた方が多くいらっしゃいました。日本のODAと民間企業の素晴らしい協業の一例と思います。

建機は正確な操業技術と的確なメンテナンスがとても重要です。また近年はIT技術の進展により高度な自動運転、一つ一つの建機の管理技術も発達してきています。訓練設備では、多くの若者が熱心に研修を受けていました。彼らはウガンダ国内やアフリカのみならず世界中で必要とされる人材となっていく可能性を秘めていると感じました。

地元では、この施設は親しみを込めて METRAC(Mechanical Engineering Training and Advisory Center の略称)と呼ばれています。



〔訓練用建機〕



〔訓練用シュミレータ〕



〔METRAC職員の皆さんと〕

(以上)